

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 佐藤 隆

蔡元培は、20世紀前半に活躍して近代中国の教育実践・教育行政に大きな足跡を遺し、現在も思想史上、当該時期を代表する重要人物のひとりとみなされている人物である。ところが、彼を対象とする日本語の専論はこれまでほとんど著されていない。本論文「蔡元培の翻訳活動を通しての思想形成に関する一考察」は、こうした研究状況に鑑み、蔡元培の思想家としての活動を、特に日本語文献の翻訳作業に注目して概括し、考察を加えたものである。

論文は以下のような構成をとる。序章では、本論文が蔡元培の活動のなかで翻訳活動に注目する理由を、その生涯や役割に関連づけて述べる。第一章「ケーベル『哲学要領』の翻訳」は、ラファエル・フォン・ケーベルの帝国大学における講義録を下田次郎が日本語に訳して出版したものを、蔡が中国語訳した経緯とその内容の紹介・分析である。第二章「井上円了『妖怪学講義』の翻訳」は、同書をなぜ蔡が翻訳紹介しようとしたか、原著と訳文とを対照し、原著の執筆意図と比較しながら論述する。第三章「パウルゼン『倫理学原理』の翻訳」は、19世紀後半に活躍した倫理学者・教育学者フリードリヒ・パウルゼンのドイツ語による著書を、蟹江義丸らが『倫理学大系』と題して日本語訳したものと、蔡がそれをもとに重訳した中国語版との比較をおこなって、蔡の訳書の特徴を考察したものである。あわせて、蔡のドイツ留学時代の受講歴の紹介と、そうした経験を持ちながらなぜ日本語からの重訳が行われたかに言及する。終章「『中国倫理学史』について」は、蔡のこの著書を先行する日本人の類書と比較しながらその概略を紹介している。

当時、中国において、西洋起源の学術を弘めるために日本語文献からの翻訳をおこなったのは、蔡元培だけではない。梁啓超など他の人物についてはこれまでもその翻訳活動が検討されてきた。だが、蔡による翻訳活動を、訳文の内容を詳細に原文と比較して分析を加えた本格的な研究はなく、本論文はこの点で学術的な価値を有する。蔡がなぜこれら3つの書籍を選び、どのように翻訳紹介しようとしていたかに関する説明も丹念になされている。

行論が入り組んでいてわかりにくい箇所があったり、叙述が時に冗長なところが見受けられたりと、なお改善の余地を残してはいるが、予断によることなく、公平に蔡の全体像を示すことに成功している点で、学位論文として十分な水準に達していると評価できる。

よって、審査委員会は博士（文学）の学位にふさわしいものと判断する。